

アルドステロン (ALD), 血清レニン活性値 (PRA), インスリン, 血中遊離脂肪酸 (NEFA), 血糖値 (BS), 血清, 尿中 Na, K 濃度とした。

結果: ANP は術中, PRA は術中, 術後に高値を示したが, ALD は変化しなかった。BS は術中 150~170 mg/dl であり, NEFA は術中減少傾向を示した。血清 Na, K 値は安定していた。術中尿量は 1.31ml/kg/h であり, 軽度の Na 貯留を認めたが, 術直後より良好な尿排泄を示し, 本輸液法の有用性が示唆された。

10) ペインクリニックにおける 2, 3 の試み

松木美智子 (日本歯科大学付属医科病院)
麻酔科

1. 25ゲージ針を使用した三叉神経ブロックの工夫, 硬膜外造影を併用した仙骨神経ブロック法を紹介した。
2. 直腸癌根治手術後の性機能障害にたいしプロスタグランジン海綿体注射を施行した症例を報告した。
3. 長期硬膜外モルフィン注入に使用している TRAVENOL Multiday Infusor および Strato Nicropump を紹介し, それぞれの長・短所を比較した。

11) 興味ある経過をたどった反射性交感神経萎縮症の 1 例

小野寺真由美・穂苺 環 (新潟大学麻酔科)

四肢に外傷を受けたあと, 交感神経の hyperactivity により生ずる持続性の疼痛症候群を反射性交感神経萎縮症 (RSD) という。今回我々は, 腰椎椎間板ヘルニアの手術を契機に下肢の浮腫が急速に改善した RSD の症例を経験した。症例は 47 才の女性で, 1987 年 acute lumbago で発症し, L4/5 の椎間板ヘルニアの手術 (ヘルニアなし), 梨状筋症候群の手術を経て, 下腿の高度な浮腫と坐骨神経領域の痛み, しびれを訴えて, 当科にて L2/3 の腰部交感神経ブロックを施行。皮フ温は上昇したが, 痛みしびれは不変であった。その後 lateral disc hernia L4/5 がみつきり後方固定術を施行したところ, 下腿浮腫は急速に改善, 痛み, しびれは不変であるが, 現在, 皮膚は暖かく発毛も認められ, RSD としては快方に向かっているものと考えられる。

12) PGE₁ 軟膏の使用経験

穂苺 環・小野寺真由美 (新潟大学麻酔科)
難治性の帯状疱疹後神経痛や反射性交感神経性萎縮症

の患者に, 従来より皮膚科で尋常性乾癬に対する塗布薬として用いられる PGE₁ 軟膏を使用してみた。本学薬剤部では製剤化されていないため, とりあえず当科で PGE₁ 500 μ g と白色ワセリン 50cc を研和練合して作成した。7 例中 4 例に有効, 2 例無効, 1 例は悪化した。

1 例は塗布後, 前胸部の疼痛が劇的に改善しペインスコアが 10 から 1~2 と軽減した。一方悪化した 1 例は, 顔がはてる感じが続き, かえって疼痛増悪した。

1 年前からアスピリン・クロロホルム塗布液も 16 例に使用しているが, クロロホルムが劇薬であり, 顔面には使用しにくい。疼痛患者には, ブロック単独でなく, 理学療法や塗布薬など種々の治療を組み合わせ, 少しでも除痛が得られるようくふうしたい。

13) 硬膜外ブロックに併発せる傍脊椎膿瘍の 1 例

小形 雅子 (小形 外科 医院)
丸山 正則 (新潟市民病院麻酔科)

帯状疱疹後神経痛 (PHN) に対する持続硬膜外ブロック療法中, 縦隔膿瘍をきたした症例を経験したので反省を含め紹介する。発症後約 1 カ月を経験した胸部 (Th6~7) の PHN の 73 歳女性に, 硬膜外カテーテル挿入し局麻薬注入により疼痛管理を施行。約 1 月半後熱発あり, 胸部レ線にて肺炎が疑われたが, CT の結果縦隔膿瘍指摘され, カテーテルの造影にてカテーテルが縦隔内にあることが確認された。ドレナージにより膿瘍消失, PHN も軽快し退院した。本例は傍脊椎縦隔内に留置されたカテーテルからの局麻薬注入により, 脊髄神経, 交感神経がブロックされ硬膜外ブロック類似の効果を示したためカテーテルの位置異常の発見が遅れてしまった。持続硬膜外ブロックでは, 挿入後効果の異常や感染の兆候があるときは, こまめに硬膜外造影を行なってみる必要であると考えられた。

14) Heerfordt 症候群の 1 症例

熊谷 雄一・飛田 俊幸 (都立神経病院)
河田 啓介 (麻酔科)

顔面神経麻痺は, ペインクリニックでも比較的良好に経験する疾患である。サルコイドシスに合併した顔面神経麻痺 (Heerfordt 症候群) を経験したので報告する。

症例は 57 才, 女性。9 月初旬に顔面の麻痺に気づき, 某病院に入院。同じ頃, 下肢に複数の結節を認め, 軽度の発熱と耳下の腫脹を自覚していた。羞明感も強く近医眼科で虹彩炎の診断を受けていた。最初の入院ではステ